

羅末・麗初の過渡期的華嚴思想

李 杏 九(道業)

三国の統一を完成した文武王（六六一～六八一）代から惠恭王（七六五～七七九）代までに至る新羅時代の思想界の特色は、仏教の教學的研究が非常に盛んに行なわれたところであつたと言える。當時の教學としては、華嚴・唯識・戒律・淨土・天台等の諸教學が流行していたが、その中で最も盛んに研究され、広く一般庶民の中に実践されたのは、華嚴教學であつた。

ところが、新羅末期に至つて「不立文字、教外別伝」「直指人心、見性成佛」を本とする禪派が伝来され、新しい思想の流れが新羅の社会に定着しつつ、人々の関心は教學仏教から禪門へ移されたようである。新たに登場した禪派は、当然、思想の面に於いては教學仏教に対する挑戦であり、社会制度の面に於いては、中央執権の絶対王権を否定する性格と結び付くようになった。

即ち、心を淨め、悟れば、誰しもが仏になれると言う禪宗の思想は、新羅下代に六頭品に転落した旧王族及びその出身の僧侶達に非常な関心呼び起した。新羅末期の所謂九山禪門の開山祖やその門人達の伝記を、『朝鮮金石総覧』や『祖堂集』に依つて見ると、いずれも禪門に入る前、華嚴を学び、その大家であつたことがわかる。従つて、ここでは新羅末期から高麗初期にわたつて成り立つた九山禪門の開山祖やその門人達を中心として、彼らが教學から禪門

に入る過程を考察し、教學から禪學へとの時代的思想の推移と、それが教學に及ぼした影響について論究して行きたい。

九山禪門の一つである聖住山、聖住寺の開祖である無染（八〇〇～八八八）は、『朗慧和尚碑』に依れば、當時、華嚴の中心地であつた浮石寺で華嚴を學んだ。その後入唐した時にも華嚴を學んだが、教學の限界性に覺め、馬祖道一弟子である如滿に參じたのである。また、無染の弟子である麗嚴（八六二～九三〇）も、初めには無量寺の住宗法師の下で華嚴を學んだが、教學が思辨に片寄つてゐることを認識し、教を捨て、禪門に入つた。

獅子山興寧寺の開山祖である道充（八〇〇～八六八）は、『祖堂集』に依れば、十八歳の時、鬼神寺で華嚴を學んだことがあり、その後入唐して南泉普願禪師に投じたと言われている。彼の弟子であり、興寧山派の第二祖であつた折中も、早くから浮石寺で華嚴を學んだことがある。また、桐裏山の開山祖である惠哲（七九一～八六一）も『大安寺寂忍禪門照輪清淨塔碑』に依れば、

年当志學。出家止于浮石寺。聽華嚴。

と、浮石寺で華嚴を修學したことがある。彼の法嗣である桐裏山門玉竜寺派の道説（八二七～八九八）も、月遊山華嚴寺で大經を學んだ。すなわち、

月遊山華嚴寺。讀習大經。不闕歲以通大義。……年二十矣。忽自念曰。大丈夫當離法自靜。安能兀兀守文字間耶。

と言ひ、桐裏山の惠哲をたずねて行つたと記されている。九山禪門の中の一つである実相山の開山祖である洪陟の弟子として第二祖になつた秀徹も、禪門に入る前には華嚴を學んでいたし、闍岫山の第二祖である開清も、一時、華嚴寺で華嚴を修學したことがある。彼

と同門である行寂も、海印寺で雑花の妙義を学んだことがある。

以上のように、九山禪門の開山祖としては、恵哲・道允・無染・道憲等四人、第二祖としては秀徹・道詭・折中・行寂・開清・麗嚴等六人である。これら開山祖の中、道憲の外にはみんな入唐して、そこで修学したことも見逃せられないことである。

禪法の伝来に依つて、諸教学は衰えたのが事実であるが、それにもかかわらず、華嚴教学のみは法統の命脈が絶えず、高麗・李朝、そして現代に至るまで研究され、実践されている。そして、華嚴思想がこのように衰えなく継承されて来た原因は何んであり、韓国仏教に於ける教禪一致ないし融合の思想はどこから淵源されたか。前者は華嚴思想の社会的基盤のゆえであり、後者は九山禪門の僧侶達が禪門に入る前に修得した華嚴思想に基因されたと言つてもよい。

初めに華嚴思想の社会的基盤と言うのは、王室、即ち、執権者との深い繋がりを指す。言いかえれば、華嚴経はその性格が普遍的な立場をあらわし、円融無碍なるが故に、禪宗の思想よりは執権者にとつて都合がよかつたと思われる。中国に於いても、華嚴教学が大成されたのは、国家の絶対的な保護があつた則天武后の時であつた。則天武后は自己の革命を正当化するために法蔵を迎え、華嚴思想を政治的に利用した。日本に於いても、東大寺が建てられ、大仏が造られ、地方に国分寺が建てられたのは、国家に依つて仏教が保護された奈良朝であつた。東大寺の理念となつた華嚴経は、整然として統一のある宇宙の秩序を表現した經典であり、それは同時に統一国家のシンボルとも言える。

羅末・麗初の政治基盤がまだ確立されていなかった時に、高麗太祖や光宗が、華嚴宗の坦文（九〇〇〜九七五）や均如（九二三〜九

羅末・麗初の過渡期的華嚴思想（李）

七三）を迎え入れ、密接な関係を持ちながら仏教政策を行なつたことも、強力な統一国家の基盤を構築しようとした彼らの政治理念と華嚴思想とが一致したからではなからうか。

二つには、韓国仏教に於いて禪教一致や融合思想の根源問題である。

義湘大師以後、華嚴を大成し、華嚴思想の民衆化に勤めた均如や、現代韓国仏教曹溪宗の開山祖と称せられる知訥の教禪一致や融合思想は、中国の法蔵・宗密思想に依るものであるといわれている。もちろん、彼らの影響がなかつたとはいえないが、以上調べたところから見ると、九山禪門僧侶らが禪門に入る前に習得した華嚴思想から、教禪一致の思想が始まつたものと思われる。

- 1 『朝鮮全石総覧』上、七五〜七六頁。
- 2 『前掲書』上、一三一頁。
- 3 『祖堂集』卷第十七、『饒峯和尚』条。
- 4 『朝鮮全石総覧』上、一五八頁。
- 5 『前掲書』上、一一七頁。
- 6 『前掲書』上、五六〇頁。
- 7 『前掲書』上、五七頁。
- 8 『前掲書』上、一四一頁。
- 9 『前掲書』上、一八二頁。
- 10 鎌田茂雄、『中国華嚴思想の研究』一四五〜一四六頁。
- 11 渡辺照宏、『日本の仏教』七七頁。

（仏教大学大学院）